

大阪大学のプライド



巻頭言

鷺田 清 一*

Let's take pride in our school of Osaka University

Key Words : proud, philosophy, the assembly hall of Osaka Univ

この8月25日で大阪大学の総長職を退任した。副学長時代をふくめ、7年5カ月にわたる大学本部での仕事を終え、ひとりの「哲学研究者」に戻った。在任中にもっともこころを砕いたことの一つについて、ここでは語っておきたい。それは、学生には「大阪大学で学んでよかった」、教職員には「ここで働けてよかった」、地域の人たちには「大阪大学が近くにあってよかった」と、あとでふり返って言うてもらえるような大学に大阪大学がなるということだ。

これは、阪大の構成員であることにどのようなプライドをもてるかという課題だと言いかえることもできる。そのために採った方策は、教育・研究から就労形態まで大学運営のすべての点で、他に類を見ないような《阪大スタイル》を構築するというものだった。研究プロジェクトのサポート体制や若手研究者の支援、コミュニケーション教育や研究科をまたぐ高度教養教育、市民と膝をつき合わせて議論する「社会学連携」、理事から非常勤職員まで丸テーブルで話しあう職員カフェなど、そのいくつかは阪大ホームページの「阪大スタイル」の項にまとめて掲載している。

もう一つ採った方策は、学生が毎日過ごすキャンパスに、教室以外の自由な活動のためのスペースをたっぷり造るというものだ。以前の阪大には教室とクラブの部室以外に、学部・研究科の枠を越えて

皆がなんとなくたまり場にする、そしてそこから思いもかけない学生の創造的な活動が生まれる、そうした「無目的」の空間がきわめて乏しかった。それで新棟を建てるたびにたとえばその一階を学生のためのフリースペースに充て、旧棟なら改修の折にその一部を学生の自主的な活動用の空間とするよう努めた。通学路である阪大坂の整備、中山池周辺の野外ステージを含む芝地の整備なども、その一環だった。宮原秀夫前総長時代から続いたこの整備事業で、豊中キャンパスは見違えるように変わった。

こうした事業に力を入れたのには、一つのフィロソフィーがあった。それは、ひとりのプライドというものは、他に勝るような素質や能力をもっていることを内に確認することによってではなく（それは所詮、相対的なものにすぎない）、他者から贈られるというものだ。「自分なんかいてもいなくても同じ」という思いはひとりのプライドを損なってしまう。ひとは自分の存在がまわりから大事にされていると感じることで、大事にされているそんな存在を粗末にしてはならないと思うことができる。だから、学生たちが大学は自分たちを大事に思ってくれていると肌で感じられるようなキャンパス整備に、副学長・総長としてのこの八年間、いちばん力を入れてきた。学生たちをできるだけ学外に連れ出すような教育プログラムも重視してきた。阪大のこのころのシンボルともいべき「大阪大学会館」も完成した。

おかげで、学生たちの「眼力」ならぬ「顔力」も幾分、強度を上げてきたような気がする。大阪外国語大学との統合の効果もおそらくはあるのだろうが、食ってかかってくるような学生、落ち込んでも落ち込みを表現しようという学生も増えてきたような気がする。

退任まぎわ、ひとりの市民の方からいただいた「大阪大学がこのところすごく近い存在になってきました」という言葉は、わたしの宝物だ。



*Kiyokazu WASHIDA

1949年9月生
京都大学大学院文学研究科博士課程修了
前大阪大学総長
(2007年8月から2011年8月まで)